

すぱいかぶり姫

vitaminsp

冷戦下、とある社会主義国家の郊外に一人の美しく心優しい娘がいた。彼女は、白く透き通った肌と艶めくブロンドの髪を持ち主で、名はシンディ・レイラ。シンディの両親が亡くなったとき、シンディは養子にもらわれたが、養母はとても意地が悪く、掃除、洗濯、食事の支度などすべてシンディにやらせていた。

その頃、その地域にはあるCIAのエージェントが潜入していた。コードネームは“MOUSE^{ねずみ}”。彼の屈強な体には似つかわしくない名前だった。

彼はもうかれこれ五時間は走り続けていた。どこまでも続いているかのように感じられる森。ベテランの彼に言い渡されたミッションは、一人の少女への物資の運搬だった。しかし彼には不思議だった。危険を冒して敵国に潜入し、少女と接触することに何の意味があるのだろうか。

さらに走り続けること二時間。彼が指定されたポイントに到着すると、いた。薄暗い森に射す木漏れ日のように。指令書に書かれている通りの美しい少女がいた。

「合言葉は？」

「Cast a special spell on me.」

「君がシンディ・レイラか。その合言葉にはどんな意味が？」

「細かいことはどうでもいいじゃない。」

とシンディはそっけなく答えた。見た目以上に大人びているようだ。

「それよりも早く約束の物を。」

「ああ、ちなみにその中身は？」

「ドレスよ。明日の舞踏会に潜入するのは私。あなたはそのサポートよ。」

こんな少女がエージェントをやっている、しかも大統領への接近という重大なミッションをまかされているとは。同時にMOUSEは自分のミッションの本当の意味を理解した。MOUSEの驚いたような表情に対し、シンディは

「見縊らないで、必ず成功させるわ。」

と言った。その表情はさながら猫のようだった。

舞踏会に潜入する目的は、この国が開発している兵器に関するデータ。それがアメリカの手に渡れば、膠着状態から抜け出し、有利になれるという。シンディが舞踏会の合間に、大統領の部屋に忍び込み、データを盗み出す。そしてMOUSEはボーイに扮して無線でシンディをサポートするというのが二人の作戦だ。

舞踏会当日の夜、会場である官邸には各界の有力者が集まっていた。しかし会場にはきらびやかな装飾が施され、豪華な演奏が流れていたため、むしろ和やかな雰囲気が漂っていた。

そこにシンディを乗せた馬車が到着した。馬車は目立たないように地味に作られていたが、それが逆にシンディの美貌を引き立ててしまった。シンディが出てきた瞬間、その美貌に注目が集まり、歓声上がる。

その騒ぎに気付いた大統領がシンディのほうを見ていた。そのまま大統領はシンディに歩み寄り、

「あとで私の部屋に来なさい。」

と耳元で囁いた。

大統領が離れたのを確認して、MOUSEはすぐに無線を鳴らした。

「まずいぞ、完全にお前の存在を大統領に悟られた。」

しかし

「あら、正々堂々と正面から大統領の部屋に入れるのよ？かえって好都合だわ。」

と言われ、大した度胸だ、と思った。

和やかな雰囲気のまま、舞踏会は進んでいった。豪勢な食事を楽しむもの、純粹にダンスを楽しむもの、有力者にすり寄ろうとするもの、参加者の様子は様々だった。

その間、MOUSEはボーイとして働きながら会場を調べていた。各界の重要人物が集まっているだけあって警備は嚴重だ。たくさんの兵士が警備についていて、装備もしっかりしている。バレたらひとたまりもなさそうだ。

華やかだった舞踏会も大統領のあいさつで終わりを迎えた。会場にはまだ余韻が残っていたが大統領は自分の部屋へと帰っていった。そして、シンディもゆっくりと大統領の部屋へと歩いていった。

大統領に勧められ、部屋の中に入ったそこには高級そうなインテリアが並び、その中央の巨大なコンピューターが異様な存在感を放っていた。大統領はグラスにシャンパンを注いでいた。グラスの一つを手渡ししながら大統領は言った。

「こんな美しい娘が来ているとは思ってなかったよ。君の瞳に乾杯だ。」

今すぐにグラスを投げつけたいくらいに気持ちが悪い。ただミッションのためにもうひと踏ん張りすることにしよう。

「お世辞でも嬉しいです。大統領も渋くてカッコいいですわ。」

大統領はグラスのシャンパンを飲み、シンディに向かって笑い、それからシャンパンを飲み干して言った。

「ありがとう。私はシャワーを浴びてくるから、好きにくつろいでいてくれ。」

そうして大統領は部屋の奥へと消えていった。しばらくして、シャワーの音が聞こえ始めた。それを聞くや否や、シンディはデータを探し始めた。

部屋の中央のコンピューターを起動、そしてパスワードを入力。ここからは膨大なデータをしらみつぶしに探していく。ただ、間に合わなくはない。

モニターに向けて意識を集中させる。しかしシャワー室の方にも注意を向けなければいけない。モニターの動きが止まる。データが、見つかった。

同時にシャワーが止まり、ドアの開く音。まだコピーは終わってない。シャワー室の方を見ると、そこには真っ白バスローブ姿で拳銃を持った大統領が立っていた。

「そこまでだ、子猫ちゃん。」

咄嗟にシンディも拳銃を抜いた。しかし引き金は引けない。ここで大統領を殺せば、二国間の関係は悪化し、冷戦から熱い戦争へと逆戻りだ。

モニターにもう一度目をやる。コピー完了までは、あと、五秒...四秒...三...二...一...

その時だった。破裂音とともに部屋に煙が充満した。シンディは記録媒体をコンピューターから引き抜き、体を入口の方へひねる。誰かがシンディの腕をつかみ、引っ張った。誰かは見えなかったが、きっとMOUSEだ。

ドアを破り、部屋から出た。やっぱりMOUSEだ。シンディはドレスの裾を破き、それから二人は逃げるために走りだした。息を切らしながらシンディは聞いた。

「いったいどこから外に逃げられるの？」

「厨房が物資の搬入口とつながっている。そこにバイクを用意しておいた。」

やっと警報が鳴り始めた。しかし幸運なことに、舞踏会の終了から時間が経っていたため、官邸内にはあまり警備の兵がいなかった。それでも見つければ、すぐに追いかけてきた。

厨房にたどり着き、ドアを開くとたくさんの料理人がいた。悲鳴と皿の割れる音。お構いなしに二人は走っていく。警備の兵士も到着したようで、後ろから銃声が聞こえる。搬入口まではもう少しだ。

搬入口に入って左に二台のバイクがあった。どうやらキーは挿しっぱなしのようだ。二人は飛び乗り、エンジンをかけ、平行線を描くかのように並んで、走り出した。

後ろから同じようにバイクに乗った兵士が追いかけてきた。二人は森に入り、木々の間を走り抜けていった。

シンディは拳銃を抜き、後ろを向いて構えた。引き金を引いた次の瞬間、兵士のバイクの前輪がパンクし、バランスを崩し、兵士は投げ出されていった。同様にMOUSEも次々と兵士を倒していった。

追っ手の兵士が見当たりなくなり、しばらく走った後、二人は山小屋で休みながら本部と連絡をとることにした。MOUSEが暖炉に薪をくべていると、後ろからシンディの声がした。

「これ、大統領の部屋にあったワインよ。二人で飲んじゃいましょう。」

MOUSEは半ばあきれながらも賛成し、二人はワインを飲み始めた。

しかし、飲み始めるとMOUSEはすぐに寝てしまった。次に起きたときにはもうシンディの姿はなく、シンディの無線機が横に置かれていた。そしてそこから音声が始まった。

「〇時ちょうどをお伝えします。」

シンディの声だった。

「これは録音された音声です。」

「あなたがこれを来ているときには私はもうはるか遠くにいる。もうきっと二度と会うこともない。今までありがとう。でもね、残念なお知らせがあるの。私はCIAのエージェントなんかじゃない。私はソビエトのスパイ、つまり二重スパイということ。このデータは持ち帰らせてもらうわ。ごめんなさい。ただ、あなたと過ごした数日間は本当に楽しかった。」

すべてが流れ終わると無線機から煙が出てきた。

そしてMOUSEの魔法は解けた。